

私は魔法使い

人見知りをおぼらせ
ずっと森の館で
一人魔法を探求してきた

すごい…!

そして作り出したのが
この使い魔の少女

ご主人様はやっぱり
魔法の天才…

もっと多くの人に
知ってもらわなきゃ…

いや…

私は一人が性に
合ってるから…

従順に私に尽くし
何事も完璧にこなす…
我ながら完璧だ

しかし私は
大きなミス
犯した…

しかしずっと一人
というのはあまりに孤独だ
…でも人とは関わりたくない

しゅん…



じゃあ

ご主人様は私のこと
嫌い…なの？



じ
わ…

なまじ私の好きな
見た目にしたせいで



私とあなたは
そう言う関係じゃな…

い…



んんっ！



罪 兎 感

うっ…！

私が人に慣れてない
せいで強く出られない…



す…

少しだけなら…

この子は一度こうなると
しばらく制御ができない

ご主人様…
もっと
くっついていい？

いいけど…

ほ…ほ…ほ…なにね？

可愛いけど毎日これでは
耐性のない私の心臓が
持たなくなりそう…

寂しかった今までの
日々が嘘みたいだ…

ご主人様…

好きな人同士は
こうして肌を
直接重ねるらしい…

そしてさらに
困ったことに
この子は好奇心旺盛で

ええ…！

しゅるん

ちょ…ちょっと

とどまるところを
知らない…

ご主人様…

ただでさえ人との
関わり方が
分からないのに

ま…待って…

こういうときは
どうすればいいの…

えへへ：
ご主人様

これすごく
幸せ…

温かくて
柔らかくて…

んん…

ドキドキしすぎて
おかしくなりそう…

ちゅっ

ご主人様…
私と一つになろ…？

へっ？

ま待って…！
これ以上はまだ
早いよ…！

えー？

でもこれ以上は私の
心臓が止まっていそう…！











